

# 子どもの本

研究会



【私の一冊】

『神聖代』

荒巻義雄 著



横田 真



1992年12月、私はプラド美術館（スペイン・マドリッド市）の一室で、「快楽の園」と対面していた。1500年前後（日本であれば室町時代後半で銀閣寺が創建（1490年）された頃）に描かれた三連祭壇画である。レオナルド・ダ・ヴィンチと同じ時代に生きたオランダ人ヒエロニムス・ボッスが書いた宗教画で、左翼パネルにはエデンの園が、右翼パネルは化物達に苛まれる人々の姿が、そして中央パネルには裸体の男女による性的快楽の様子が一面に描かれている。1992年の7月からワシントンに留学していた私は、イギリスで開催される国際会議への参加の機会を使い、この絵を観るのを目的にスペインに立ち寄ったのであった。

この絵の存在を教えてくださいましたのが、荒巻義雄の『神聖代』である。1978年、私が大学に入った年に発表されたこの作品は、1千光年の版図を持つ大教国の首都イジチュールで開催された「神聖試験」を受験した若者Kの巡礼物語である。試験合格後の研修の場である修道院、職場のボッス星研究所、ボッス星への途上にある境界の星ローラン、そしてボッス星。これらの場所でKは、「快楽の園」から喚起される表象を見せられ、様々な経験をしていく。淡々とした文体で語られた幻想SF作品に、10代後半の私は魅惑された。そして、著者がそれを題材に物語を書こうとするほど印象深く謎めいた絵は、何故この時代に、何の目的で描かれたのか？ その時代の人々ほどのような感性を持っていたのか？と、様々な問いを私に提示してくれた。なお、何故このような宗教画が描かれたのかについては、いまでも定説はないとのこと。

この本との出会いがきっかけとなり、通商産業省での海外出張の際に、合間を見つけては近くの美術館にあるボッスの絵を覗きようと試みるようになった。そしてそれが私の美術館巡りの趣味へとつながっていった。美術の授業が苦手と絵画に関心を持っていなかった私が、ルーブル、ナショナルギャラリー、エルミタージュ、ウフィッツイなどの有名美術館を訪問し、絵画鑑賞を楽しむようになったのは、この本のおかげである。人生を豊にするきっかけを作ってくれた本と言える。今回、中野区立図書館から借りて再度読んでみたが、読み物としてもまた新鮮な気持ちで楽しませてくれた。



（特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 理事長）